慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国に於ける詩の活用 : 蔵書家を詩に詠んだ名作
Sub Title	Practical application of Chinese poetry : a poem concerning Zoshoka (a special librarian)
Author	髙橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.122 (121)- 126 (117)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度藝文学会シンポジウム「詩とその活用 : 5カ国篇」 開催日: 2019年12月13日 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール・ 東館5階
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国に於ける詩の活用
── 蔵書家を詩に詠んだ名作

髙橋　智

本日は「詩とその活用」というテーマですので、中国文学史にも現れてこない詩、詩はこのようにまで活用されるのだという実例を一つご紹介したいと思います。

詩というのはそもそも何でしょうか。プリントをご覧ください。宋代の十二、三世紀の学者の手になる『詩経集伝』という本がございます。『詩経』というのは中国で一番古い詩文集と言われていますが、その人の詩経に対する序文があります。その一行目に「人生まれて静なるは天の性なり。物に感じて動くは性の欲なり。それ既に欲有るときは思い無きこと能わず。既に思い有るときは言無きこと能わず。」とあります。生まれて人の心というものはそもそも静かなものであるけれども、何か物に感じると、その心が躍動していく。躍動すると、思いが生じてくる。思いが生じるとそれを必ず言葉に表すようになるということです。しかしながら、その次に「言の尽すこと能わざる所にして咨嗟詠嘆の余に発する者の」、つまり言葉では表すことができない余剰というものがあるとあって、「必ず自然の音響、節奏有りて已むこと能わず。」必ずそこに節奏、メロディーが生じると。つまり言葉で現れないものを音楽に託すということです。「此れ詩の作れる所以なり」ですから、詩はこうして出来上がったものであると。つまり詞（ポエム）と音楽が一緒になって一つの表現ができるのだと言われているのです。これが伝統的な中国の詩の味わい方、観念だったということがわかります。それによって叙情詩や叙景詩、恋愛詩 ── 恋愛詩というのは非常に少ないですけれども ──、それから絵や書を権威づける題詩というものが生まれました。ところが清朝の末期、二十世紀ぐらいになると、まったく変わった詩の形が現れた。それが「紀事詩」というもので、これから『蔵書紀事詩』の話をしたいと思います。

「紀」は「事実を紀す」ということですから、「紀事詩」とは事実を記す詩なんです。ですが「事実を紀す」と言っても、言葉ではなかなか表しきれないもの、言外に託すとても深い意味というものがある。言外に託する深いものを、歴史書などさまざまな書物から引用することでそれを説明して一つの詩を作り上げたのが『蔵書紀事詩』で、葉昌熾という人がその形を作り上げました。これがどんなものかといえば、資料にありますように、「我が国の蔵書家の流れを詩と叙述であらわしたという独特の体例を発明した。」それは一人の蔵書家について、七言絶句の一首を付け加えて、その後に歴史書や詩文集などさまざまな史料を引用して、さらにそこに評を加えて一つの詩文集として完成したもの。それが十世紀くらいから清末、二十世紀に至るまで、約一千百人くらいの蔵書家について詩を詠んで、その事績を簡単に説明した。」それが葉昌熾の『蔵書紀事詩』です。これは大変画期的な作品でして、文学史に連ねられるものではありませんが、中国の書物文化史にあっては燦然と光り輝く、まさに中国の一番伝統的な文学形式である詩を用いて蔵書家というものを分かりやすく人々に伝えようとした事績だと思います。その後、「正史より以って稗乗方志、官私簿録、古今の文集に及ぶ。」とありますので、歴史書から「稗乗」すなわち民間の歴史とか、「方志」つまりは地方の歴史から採取して詩を詠んだということです。葉昌熾は蘇州の人で、「学問淵博、尤も金石、版本の学に長ず。」とあります。「金石」というのは中国ではもっとも伝統のある学問分野で、石とか金属に文字を記した碑文とか石碑とかの研究を指します。彼はかつて清末の大蔵書家である潘祖蔭という人の家に住んでいて、その人の所蔵する蔵書の目録、『滂喜齋蔵書記』を作ったのですが、これも書物の歴史の中では燦然と輝く業績となっております。では本題の『蔵書紀事詩』の内容はどういうものかということを、二人の蔵書家の例を挙げてお話したいと思います。

『蔵書紀事詩』は最初の一行目が七言絶句の詩になっていて、その下に蔵書家の名前が小さく書かれております。この蔵書家はこういう人だというのを詩に詠んだということです。「蜀本九経最も先に出づ、後来孳乳、長興に到って、蒲津の毋氏家錢にて造る。海内に通行し、價倍増す。」これは『蔵書紀事詩』の一番最初に出てくる、十世紀の毋昭裔という人についての詩です。中国では十世紀に書物の印刷が始まりますが、毋昭裔は最初に印刷に関わった人だと言われております。そして「守素」というのは毋昭裔の子どもと言われております。「蜀相毋公、

蒲津の人。」「蜀」というのは四川のことで、毋昭裔は四川の国で宰相になった。「先は布衣たり」ですから、以前は普通の民間人で、かつて『文選』とか『初学記』を人に借りて読もうとした際に、「多く難色有り」、誰も本を貸してくれなかった。そこで「公嘆じて曰く」、どうも私は貧乏で本を買う力がないけれども、やがて力が備わったらこれらの本を出版して、いろんな人が読めるようにしてあげたい、というんです。ですから「庶願わくは天下の学者に及ばん」ということです。後々に毋昭裔は成功して宰相になったわけですから、これらの本を出版しました。しかし蜀という国が北宋に吸収されたときに、金持ちは皆財産を没収されたんです。ところが「藝祖書を好むに会いて」とあり、「藝祖」は北宋の国を建てた趙匡胤のことで、この人は大変な書物好きでありました。そこで趙匡胤は国中にある書物を全部宮中に収めさせたわけです。そうした本を見ていたら、「忽ち見る、巻尾に毋氏の姓名有り」、その本の後ろに毋昭裔の名前があった。これは何だと家来に聞いたところ、これは毋氏という人が自分のお金で出版した本だと聞かされた。話を聞いた趙匡胤は大変喜びまして、没収した本を全部毋氏に返してやったという話なんです。そして、毋昭裔の子どもの守素が、宋の国の都である河南省に行って、その本を売って流行させた。それによって、その本の値が高くなったと。「初め蜀雕印の日」最初四川で本を出版していたときは、「衆笑う」みんな馬鹿にしたわけですが、後に金持ちになって、「子孫禄食」子孫が繁栄しまして、笑う者は皆この人の家にお金を借りに来たというわけです。

「蜀本九経最も先に出づ」とありますが、「九経」とは儒学の経典で、毋昭裔はそれを一番最初に出した人だということです。「孳乳」は「増えていく」、「長興」は十世紀の年代ですから、十世紀の出版が盛んになった時期にまで至り、それは毋氏が家銭で造ったものである。そして海内にその本が通行して、その本の値が高くなった。このような詩を詠んで、蔵書家の業績を称えたということです。

次にお話しするのは大変面白い蔵書家です。「部帙を成さずとも但平平。漆室燈昏くして百感生ず。安んぞ帰来堂に上坐することを得ん。放懐一笑茗甌傾く。」この詩だけ見ていても何を言っているかさっぱり分かりませんね。ただ後ろに書いてある事績を読みますと、この人の業績をぴたりと七言絶句に詠んでいる、素晴らしい詩なんです。これは趙明誠という十世紀後半から十二世紀初めの北宋の人の話で、彼は金石を集めた本『金石録』を最初に出した人です。「李清照易安」とありますが、「李清照」とは趙明誠の奥さんです。この二人はともに大変な書

物好きでした。二人がどんな生活をしていたかというと、「後両郡を連守して、其の俸、竭く入りて以て鉛槧を事とす。」、趙明誠は就職してお金を得るようになったら、お金は全部本に費やしたというんです。「共に校勘をなして、籤題を整え集む。」つまり、奥さんと二人で買った本をテクスト・クリティークして、そこに題名を書いてきちんと整理していた。そして二人がどんな遊びをしていたかといえば、「余性偶強記」、「余」というのは李清照を指し、「私はたまたま博覧強記であった」と。二人で「毎飯罷む」食事の後に、「帰来堂に坐して烹茶す。」帰来堂という自分の書斎で、お茶を飲んでおりました。そのときに山のように積んである本を指さして、「某事某書某巻第何葉第何行にあるかをはかりて中否を以て勝負を角べ、飲茶の先後を為す。」こういうことはどの本の第何巻目の第何ページ目の第何行に出てるかなとクイズに出し、当てた方が先にお茶を飲むという遊びでした。ところが、当たると喜んでわっと立ち上がり、そこにあったお茶の椀をこぼしてしまうんです。こぼしたお茶の椀で衣に濡らして飲めなかった、これが「茶懐中に覆するに至りて、反って飲むを得ず。」の箇所なんですね。

そのような二人ですけれども、北宋には金という異民族が攻めてきました。趙明誠は山東省にいたんですが、山東省は金がどんどん攻めてきた地域なんです。「聞く金人京師を犯すと」ですので、北宋の都である開封を金は攻めていったと。「四顧茫然」みんなどうしようかという状況です。山東にいた趙明誠は南へ逃げるべく、船に本を乗せて南に下りましょうとなった。「先ず書の重大印本なるものを去り」、まず重い本を捨てましょうとなり、次に「畫の幅多きものを去り」何幅もある絵は捨て、「古器の無款なるもの」古い器物で年号の入っていないものは捨て、「書の監本なるもの」「監本」というのは大学が出した本のことですが、ただ権威づけだけの本はもう捨てましょうとなりました。こうして本はなくなってしまうんですが、それでも十五の車に満載したといいます。それで南京にまで至りました。「金人青州を陥しうる」自分が去るときに自宅に残してきた本も、金の人がそこに攻め入って、皆灰燼に帰してしまいました。さらに趙明誠は浙江省の湖州の辺りに来ました。ただそこにいても不安で、江西省の洪州に自分の友人がいるので、そこに本を全部送っておこうとします。ところが本を送ったところにまた金が攻め入って、本が全部焼かれてしまった。残ったのは少しの写本と「李、杜、韓、柳」李白、杜甫、韓愈、柳宗元の詩集が少しだった。そうした本を親戚がいる剡に預けたわけです。ところがそれも軍隊が全部持って行ってしま

って、それもなくなってしまったわけです。さらに、「会稽に在り」「会稽」とは紹興ですけれども、そこである民間人の家に間借りをして住んだ。しかし家の壁に穴を開けられて「五籠」の本を盗まれたというんですね。それで懸賞をかけて買い戻そうとしたけれども、もう買い戻せなかったんです。そういったものは全部「今知る盡く呉越の運使、賤價をもって之を得ん。」役人に安い値段で売られてしまった。だから、「十のうち其の七八を去る」ほとんど手元には本がなくなってしまい、「一二の残零部帙書冊を成さず」本の形を成していないものばかりになってしまったと。つまり「三数種平平の書帖」もう二、三種類の書状のような、ほとんど価値のないものしか残らなかったんです。それでも趙明誠は本を愛してやまず、いつも自分の頭の前に置いて寝ていたんです。何と愚かなことでしょう、と李清照が夫の趙明誠のことをなつかしく書いているわけです。このような記事を詩に詠むとどうなるかというと、「部帙を成さずとも但平平。漆室燈昏くして百感生ず。安んぞ帰来堂に上坐し、放懐一笑茗甌傾くことを得ん。」笑いながらお茶をこぼして書物を楽しんでいたあのときのことは望むべくもないとなります。蔵書家には悲しい最期をたどっていく人もいることを詩に詠んだということです。

このように、ある人の事績を簡便に、しかも読む人に感動を与えるように詩の形で伝えようとしたのが『蔵書紀事詩』です。千百人ほどの蔵書家について書かれておりますので、色々な面白い話がここには出てくるんですね。ですから葉昌熾の努力があって、中国の蔵書家という地位が確立したと言えるのではないかと思います。『蔵書紀事詩』という詩を活用した一つの作品が中国にあるということをご紹介して、中国の詩の活用のお話とさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。